その先にきっとあるもの

小松﨑　有美

子どもが学校に行きたくないと言ったら、親はどうするべきなのか。私はあのときからずっとその答えを探している。

それは息子が小学校二年生のときだった。夕飯時に一本の電話がかかってきた。それは担任の先生からだった。その日、息子が友達に鉛筆を折られたらしい。相手はほんの悪ふざけのつもりだったと言う。

「子どもたちの間では解決してますから、あとはお子さんに話を聞いてみて下さい。指導が行き届かず申し訳ありませんでした。」

「あ、はい……」

私が発した言葉はそれだけだった。それから電話を切ると今度はその保護者から電話

がきた。やはり鉛筆を折られていた。
「子どもにはよく言って聞かせます。本当にすみませんでした。」
「あ、はい……」
私は混乱していた。だってまだ当の本人から何も聞いていないから。それなのに次から次へと「すみません」の謝罪。答えを出す前に次の問題が出されるような感覚だった。
「ねえ、今日、何かあったの」
「……」
「いま、先生とお友達のお母さんから電話がきたよ。鉛筆のこと」
私は問いつめるように息子に聞いた。すると息子は重たい口を開いた。
「何もしてないのに、えんぴつ折られた」
「え？本当に何もしてないの？」
「うん。漢字テスト直してた」
「何もしてないのにやられるの？」
私は息子を疑った。火のない所に煙は立たぬというように、息子にも何かあるはずだ

と思った。だけどそのあと、息子から思いもよらぬ言葉が出た。

「だっていつもそうだから」

全身に稲妻のようなものが走った。

「いつもって、どういうことよ！」

「だからいつもだよ」

「じゃあなんで言わないの」

「……」

息子は黙りこんだ。その様子から言いたくないことは明らかだった。だけど苦しかったのだろう。息子は言った。

「ぼく、もう学校に行きたくない」

さらに私に言った。友達にからかわれていること。いたずらをされていること。仲間はずれにされていること。それらはずっと心にしまっていた真実。息子はずっと小さなプライドで隠していた。

しかし、プライドという砦が崩れた今、息子には学校に行かないという選択肢しかな

かったのだ。もう行きたくない、行かなくていいでしょと繰り返した。

「学校に行かないと困るのは自分だよ」

私は正論をぶつけた。息子は黙りこんだ。そしてそれ以上言ってくることはなかった。

翌朝、私は何もなかったように振る舞った。いつものように食事を準備し、給食の献立を読み上げた。息子が何か言おうとすると遮るように「お母さんも給食が食べたいな」と言った。息子は私の気持ちを察したかのように口をつぐんだ。

それからいつものように息子より五分早く仕事へ出かけた。まるで私が息子から逃げるような形だった。

だが始業の九時。学校から職場に息子が来てないと連絡があった。もしかして家にいるのか。それとも……。うっすら過る誘拐の二文字。私は急遽休みをもらい、自宅へ戻った。その途中、ランドセル姿の息子を見つけた。しゃがみ込んで見ていたのは蟻の行列だった。

「何してるの！」

「……」

「ほら、学校、行こう」

「やだやだやだ」

嫌がる息子の腕をギュッとつかんだ。

「いいから、行こう」

そう言って引っ張ったそのときだった。息子が私の腕に噛みついた。腕にはくっきりと息子の歯形がついた。これが七歳児の精一杯の抵抗。そして心の叫び。私はその強さでその日学校に行かせるのは諦めた。

それから来る日も来る日もやはり息子は登校を渋った。友達に会いたくない。先生と話したくない。教室に入りたくない。学校に関わる全てを否定した。思い起こさせるのは、いじめの苦しみ、そして悲しみだった。それが息子の全てだった。そんな息子でもその全てを愛せればよかった。だけどできなかった。私には学校に行かない息子を受け入れることはできなかった。

だけど息子の状態はいっそうひどくなった。登校時刻になってもまだトイレにいる。私も息子が家を出るまでは仕事に向かえずにいた。

息子が渋るたび、職場に連絡をした。欠勤も続き、これでは仕事にならない。だけどこのままでは息子がどうなってしまうかわからない。そう考え、好きな仕事ではあったが、私はパートを辞めることにした。ポストに入れる退職届。そのポトンという音は寂しかった。まるで別れの鐘のようだった。

それから私と息子の二人三脚の生活が始まった。朝から登校を渋る息子に「遅れてもいいから一緒に行こう」と言い続けた。するとだいたい二時間目の始まり頃、息子は重い腰をあげ、家をあとにした。着の身着のまま何も持たない息子に、ランドセルを持つ私。それは地図を持たない人間と、決まった目的地に進もうとする人間の対照的な姿だった。私は学校に行かせたかった。だが息子は私に逆らうように学校とは真逆に進んだ。やっぱりか。そんな気持ちで息子のあとを追った。

途中、草花に魅せられたり、虫を追いかけたりと、学校への道のりはさらに長くなる。それでも息子は気にしない。地図を持たずに進むと思わぬ発見があるように、目的を持たずに外へ出ると未知の世界が広がりを見せる。息子はその世界に心奪われ、結局、学校に行くことはなかった。私は開けることのないランドセルを持って、ただ息子のあと

をついていくだけだった。

そして夜になるとその日の会話を思い出した。「なんで学校に行かないといけないの」

「どうしてみんなはぼくをいじめるの」

飲みかけのストローの中で答えが揺れる。悩み、ふと息子の筆箱を開ければ、折られた鉛筆たち。いつの間にか上からテープが巻いてある。なんだが息子のやさしさが身に沁みた。だけどうまく巻けていない。それを包帯を巻き直すように巻いた。そして折られた鉛筆に息子の心を重ねた。息子の傷に包帯を巻けるのは先生なのか。友達なのか。学校なのか。社会なのか。折れた鉛筆をじっとみつめるそのときだった。「お母さん」と息子の声。

「眠れなくなっちゃった」

「じゃあ、お母さんと寝ようか」

息子の顔が笑った。そのときやっと気づいた。息子を包んであげられるのは私なのだと。

私はもうランドセルを持っていくのをやめた。そのあとも朝になると息子は外へ出た。

私もランドセルがなくなった分、どこか心が軽やかだった。目的地がない。いや、むしろ目的を見つけることが我々の目指す道だったのかもしれない。息子は外へ出てはあらゆるものを手に取った。落ちている小銭から手袋まで。そしてそれを交番に届けた。剥げかかった十円玉。こんなものを届けるのは恥ずかしかった。だけどそれは大人の都合。子どもにとっては精一杯の思いやり。私は息子を見て、忘れかけていたやさしさを拾った気持ちになった。

「もう届いているかなあ」

と嬉しそうに話す息子。学校には届かない笑顔だが私の心にはその優しさが届いた。道草からもらった息子の笑顔。もしかしたら、これが目的地だったのかもしれない。

そんな道草息子も今、高校生になった。現在、看護師を目指し、高等専門学校に通っている。困っている人を助けたいという思いは手袋を拾ったときのままだった。

私もまた、息子の不登校を経験し、学校という場に興味を持った。いじめ。自殺。家庭内暴力。今もそんなニュースが絶えない。子どもの問題に親はどこまで手を出していいか。嫌がる子どもを学校に行かせるべきか。そこに正解はないし、むしろあってはな

らない。

でも思う。そのことについて考え続けることは大切なんだ。

そんな思いから、五年前、スクールカウンセラーになった。だが選んだ道もまだ半ば。なかなか一筋縄ではいかない。相談室に来る子どもたちは、明日から世界が消えるような顔をしている。心が震え、揺れ、見えない痛みに襲われている。私はその痛みをせめて鈍い痛みにできるような方法を探す。

今日も相談室で「死にたい」という心の叫びを聞く。この子にとってどういう言葉がいいのか。ベストを探す。でもそれが一番かどうかはわからない。だけど、昨日より笑顔が増えた。さっきより明るくなった。そんな小さなベターを重ねてベストにする。

右往左往して答えを探す今、それはあのときの道草の続きなのかもしれない。

行く先々で心が折れそうなときもある。だけど私はめげない。迷ったっていいし、下を向いてもいいと思っている。立ち止まったっていいし、戻ってもいいと思っている。

だって、すべての道草は笑顔という目的地に向かっていると私は知っているから。